神様につかわされて

「ヨハネによる福音書」15 章 12～17 節までを朗読。

16 節「**あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実をむすび、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである**」。

16 節に、「あなたがたがわたしを選んだのではない」と語られています。私たちはイエス・キリストを救い主と信じる信仰に導かれて、神の子、神の民として生きる者となり、神様の愛を信じ、神様の恵みの中に生かされております。イエス様を信じるとは、誠に不思議な事だと思います。というのは、いろいろなきっかけがあり、誘ってくれる人がいたと、始まりはそれぞれ違った導きがあって、気がついてみたら、イエス・キリストを救い主と信じる信仰へ導かれて参りました。私たちがイエス様を調べて、この方こそ、信頼すべき、神なる方です、これにしようと決めたのではなく、いろいろなきっかけがあり、はからずもと言いますか、思わず知らず引かれて、こうなった。いつどうしてこうなったのか、自分でもあまりよくわかりません。とにかくいろいろな事の中からひたすら主を求める者とされ、神様のあわれみにあずかって、「イエス・キリストは主である」と信じて、この救いに引き入れられました。それは神様が私たちのためにご計画して下さったことです。決して人の力によって、あれこれ調べたり、研究したり、熱心な勧めに従ったから、こうなったというのではなくて、神様がよしと見たもう時に、私たちをご自分のもとへと引き寄せて下さった。これが神様の恵みであります。今、イエス様の救いにあずかった者として喜んでいますが、その喜びは神様が私たちに与えて下さったものです。だからここに「**あなたがたがわたしを選んだのではない**」と。スーパーに出掛けて、品物を選ぶがごとく、比較検討して、これがいいと、神様を比べて、「よし、自分はこの神様にしよう」と決めた人は誰もいません。神様の方が私たちに目をとめて下さった。このことは、しっかりと心に据えておかなければならないことです。「エペソ人への手紙」を開いておきたいと思います。

「エペソ人への手紙」1 章 3～5 節を朗読。

4 節に「**みまえにきよく傷のない者となるようにと、天地の造られる前から、キリストにあってわたしたちを選び**」とあります。みまえにきよく傷のない者、すなわち神様の義にあずかる、義なる者として、神様の前に罪なき者とされる。神様の救いとは、いろいろな表現の仕方がありますが、義とされることはそのひとつであります。神様の前に罪を赦される、

これが救いです。私たちは今、イエス・キリストを信じて、イエス様が私たちの罪のあがないとなって、十字架にいのちを捨てて下さったと信じ、救われたという信仰を与えられました。ここにありますように、みまえにきよく傷のない者とされた。そして、それは天地の造られる前から、まだ私たちが姿かたち、何もなかった、天も地もすべてのものが造られる以前から、キリストにあって、私たちを選びとあります。神様のほうが、やがて生まれてくる私たちのことをご存じで、時を定めて、事を起し、神様のみもとへ引き寄せて下さった。だから私たちが自分で選んだのではない。自分で努力して、獲得したのではない。神様が一方的に働きかけて、ここに導いて下さった。そんなことはない。先祖代々、うちの両親も、我が家はクリスチャンで三代目だから、だから私は救いにあずかったのだと思われるなら、それは大間違いです。いくら家族がどうであろうと、その人が救いにあずかるかどうかは、神様が選んだことです。自分で決めることはできない。だから今、信仰によって、救いにあずかっているのは、神様の一方的な恵みであり、あわれみです。

ところが、案外そこを忘れて、自分で選んだかのように思いやすい。そろそろ飽きがきたから、やめとこうか、あっちに替えようか、こっちに替えようか。そうなるのは自分が選んだと思っているからです。神様は天地の造られる前から、はるか以前から、この者を、時を定め、救いにあずからせようと決めて下さった。一方的な神様のわざであります。そして5節に「**わたしたちに、イエス・キリストによって神の子たる身分を授けるようにと**」、神様は私たちを救いにあずからせ、神の子供とするためです。「**御旨のよしとするところに従い**」とは、神様が、そのことをご自分の喜びとして下さった。いやいやながらではなく、神の子、ご自分の家族の一員としようと決めて下さったのは、御旨のよしとするところ、言うならば、神様はそれを喜びとして、私たちを迎えて下さった。これが今、私たちに与えられている身分です。そして「**愛のうちにあらかじめ定めて下さった**」、あらかじめ、前もってそうなるようにと、決めて下さった。これはただ感謝というしかない。自分の努力や熱心なわざによって救われたのではなくて、神様の一方的なあわれみがあり、また神様のご計画の中にあって、神様が喜んで下さることとして、救いにあずかった。

だから、遠慮しないで下さい。「こんな者が救われていいのか？私のような者でよかったのかしら？」と、時にそういうことを言われる方がおられます。「私のような者が救いにあずかって、皆さんのお邪魔になりますから、私は教会の一番はじっこの席でいいから、置いて下さい。天国も隅っこでいいですから」。「何をそんなこと、言うのですか」。「私のような者は、救われても、何の役にも立ちませんから」。そんなことは、神様は、百も承知です。それどころか、喜んで、御旨のよしとするところに従って、神の子としての身分を与えて下さった。神様は、堂々

と「**あなたはわが目に尊く、重んぜられるもの**」(イザヤ 43：4)、大切な存在ですと、ご自分の尊いひとり子のいのちを代価として、私たちをあがないとって下さった。今、私たちは神の子とされたという確信をしっかり握っておきたい。ですから、「ペテロの第二の手紙」に「**あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものとしなさい**」(1：10) とあるように、常に自分がどういう者として救いにあずかったか、そのことをしっかりと自覚していきたい。堂々と、神様が私を喜んで下さっていることを自覚していきたい。「**いや、どうでしょうか、神様は私の事をお気に召さないんじゃないでしょうか。私はもうちょっとましな人間になっていればよかったのでは**」と思うなら、そんなことを神様は願っておられるのではない。「コリント人への第一の手紙」を開きましょう。

「**コリント人への第一の手紙**」**1 章 26～29 節**を朗読。

ここに私たちが、なにゆえ選ばれたのか語られています。それは知恵もなく、また愚かな者であって、この世でも弱い者だから選んだとおっしゃる。まもなく総選挙があるそうですが、選挙になると、代議士が「私に投票して下さい。私はこんなことをします、あんなことをします」と公約を掲げて、選挙民の歓心を引こうとします。考えてみると、厚かましい話です。あなたはそんなに偉いのかと、ふと思ってしまいます。自分が立候補したと考えて下さい。自慢できるものがあるでしょうか。人は、何か自分に取り柄がある、値打ちがある、見どころがある、価値があることを誇りたい。ところが、神様はそういう人を退ける。「**神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜うからである**」(ペテロ第一 5：5)と。この世で愚かな者、無きに等しい者、身分の低い者、あなたはそういう者だったと、言われているのです。憤慨される方がおられるかもしれません。自分は、少しは身分がある、この世の中で役に立つ人間と思っておられる方は、お気の毒だと思います。しかし、よく考えると、愚かな者であることは事実であります。また、弱い者です。ちょっとした風の音を聞いただけで、震えあがります。何かというと、怖い、怖いと、いつも心は弱く、力を失います。

ところが、神様はこの世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち無きに等しい者、数に入らない、そういう私たちを、あえて選ばれたのです。あえて、わざわざです。そういう者をあえて、選んで下さった。だから、「何もできません、こんな小さな者、弱い者です、知恵が、力がありません、だからもう私はダメです」と言い募っても、神様の方は全部知っている。分かっているから、お前を選んだとおっしゃっている。この事をしっかり覚えておくべきです。神様は私のすべて知り尽くし、あえて選んで、この救いに導いて下さった。

「**ヨハネによる福音書**」に戻りますが、16 節「**あなたがたがわたしを選んだので**

はない。わたしがあなたがたを選んだのである」、これは本当に嬉しい話です。神様が私を選んで下さった。選挙民に選ばれたのとは違います。自らの身分をはっきりしておきたいと思います。この前半のところで喜んで、ここで腰を下ろしてしまいます。「そうなのだ。わたしではない、神様が選んで下さったのだ。うれしい。感謝、感謝」。それでおしまい。そうではありません。選ぶには、必ずその目的があります。何のために神様が選んだのか。その後に「**そして、あなたがたを立てた**」とあります。私たちを立てて下さった。立てるとは、この世にあって、弱い者、無きに等しい者でありながらも、神様の力によって立つ者と変えていただく。いつまでもこの世でしょぼくれて、日陰者になりきってしまうのではありません。そういう箸にも棒にもかからない、無きに等しい者であった私たちを選んで、今度は、神様が力を与えて、立てて下さる。今度は、私たちをこの世に置いて下さった。それは何のためか。その後にありますように、「**それは、あなたがたが行って実をむすび、その実がいつまでも残るためであり**」、私たちが実を結ぶ者となるということです。実を結ぶ者となる。今は収穫の秋です。果物にしろ、お米にしろ、収穫の時を迎えます。まさに実を実らせる。神様が選ばれた目的は、私たちを通して、神様の実をあらわす、神様の力とみわざをあらわす者となることに他なりません。「コリント人への第二の手紙」を開きたいと思います。

「コリント人への第二の手紙」4 章 7～10 節を朗読。

7 節に「**この宝を土の器の中に持っている**」と語られています。“宝”とは何か。これはイエス・キリスト、御霊、聖霊であります。キリストの霊を私たちに与えて下さった。神様が選んで下さったのは私たちにキリストの霊、神の霊、神の力を注いで下さる。土の器と言われるように、私たちは無きに等しい者、弱い者、身分の低い者、知恵のない者であります。まさに、土の器でしかない私たちに、神の霊が宿ることによって、神の力が私たちを通して現れてきます。だから 7 節に「**その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでない**」ことがわかる。土の器であって、何もできない、何の知恵もない。そういう者が、なんと神様の絶大な力に満たされて、この世のいろいろな問題の中に遣わされていく。立てたというのは、そのことであります。神様は私たちをこの世に遣わして下さった。イエス様は「**聖霊を受けよ**」とおっしゃいました。「**父がわたしをおつかわしになったように、わたしもあなたがたをつかわす**」と。私たちは何の力もない、知恵もない、吹けば飛ぶような、そんな軽い存在でしかない私たちですが、そこにキリストの力を宿すことによって、何をなさるか。神の力があらわれてくる。自分の力を見、資質を考えて、自分はこれもできない、こうなったらこうなるしかない、年も取ったし、出来ることはない。無い無いづくしになってしまった。だから、もう私はダメです。それだったら、世の人と変わりがない。あるいは、「自

分は学歴もないし、家柄もないし、自分の能力もこれだけしかないし、わたしはダメな人間、やってせいぜいこの程度、これ位のことしかできない」と、自分を土の器として見ているだけならば、何のための選びだったのでしょうか。

神様が私たちを選んで、キリストのものとして下さった。神のものとされた私たちは、土の器ではあるが、神様の手にささげて、神様からの力が注がれることによって、神の力が現れる。だからパウロはそう言っています。自分のからだに一つのとげが与えられた。それはサタンの使いであったとは言えますが、「これを何とかして取り除いて下さい」と、神様に切に祈った。その時、神様は「**わたしの恵みはあなたに対して十分である**」(コリント第二 12：9)と。その後に神様が言われたのは、「**わたしの力は弱いところに完全にあらわれる**」と。弱いゆえに、神様は、私たちに力を注いで、神の神たることを証しして下さる。だから、ただ単に、神様の救いにあずかって、「神の子とされました、あとは適当にやって下さい。果報は寝て待て、お祈りだけはしておきます」と、そうではありません。

神様の救いにあずかって、祈り求めていく時、神様は力を与えて、何をなすべきかを教え、神様の力をあらわす者として、この世に立てて下さる。いろいろな問題の中に立たせられます。その時、祈って、祈って、主を待ち望みます。神様は私に答えて下さる。答えるというのは、神様が何をどうせよと、みこころを知るのです。だから祈りは、ただひたすら自分たちの願い事を全部、神様に申し上げるだけではありません。聞く者となる。主は何を私に求めておられるのか。共にいて下さる主は、何をしようとしておられるのか。神様は私たちを通してみわざを明らかにしようとされる。そこで自分の弱さだけを見て、「出来ません。これもダメです、あれもダメです、私は何も出来ません。神様、やって下さい」としり込みする。しかし、神様は「お前がやるのだよ」と。わたしはあなたを選んだのではないか。あなたによってわたしの力をあらわすとおっしゃる。7 節に「**その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである**」と。自分の力でするのではなく、神様が弱い者を通して、ご自分をあらわそうとする。その力です。

8 節に「**わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰らない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない**」と。実にタフで、しぶとい。どんな問題の中におかれても、お手上げにはならない。しょぼくれてしまって、消えていくのではない。どんなことにも神様が力を与えて、神様のわざをして下さる。これが実を結ぶということです。神様のみこころに従うとき、神様が力をあらわす。自分の力ではない。だからいろいろな悩みの中に置かれて、世の人がお手上げ、万策尽きた、もうあきらめるほかないという状況にあっても、なお主は何とおっしゃるか。「神様がよしと思うならば、この私を用いて

下さい」と、神様の手に自分をささげていく。神様がどういう道を備えて下さるか。そこで、自分の考え、自分の計画、自分の思いを、何とかしてそれを実現させようとするのは、間違い。神様が周囲から教えて下さることはいくらでもあるのですが、聞こうとしない。ただひたすらに自分の考えに固執して、こうだからこうなるしかない、だからもう無理だと決める。自分が考えて一番良い方法はこれだと、自分にしがみついている限り、神の力は現れません。そこで謙遜になって、自分を捨てて、自分の誇りや沽券をかなぐり捨てて、頼るべきお方には頭を下げるし、聞くべきお方には聞くし、いろいろな事を通して、神様は神の神たることを現そうとされる。

だからシロアムの池で三十何年間か長いこと寝ていた人がいます。イエス様が「治りたいのか」と尋ね、「治りたい」と言う。でもこのシロアムの池に天使が下って、水を動かす最初の時に入った人はいやされる。けれどもそうでない人はいつまでも待つ。それがいつであるかわからない。天の使いが水の表面を動かす瞬間に入るならばいやされる。でも入れてくれる人がいないから、私はじっと寝てばかり。その時、イエス様は「あなたの床を取り上げ、そして歩きなさい」と、驚くことを言われた。そういう既成概念というか、自分の考えに縛られてしまう。神様を待ってはいるのだけども、いつどうなるのか、ただ祈りつつ待つ。そうではなく、祈る時、すでに主は語っておられる。今、その時が来ている。神様が立てとおっしゃる時が来ている。それなのに、いつまでも「水が動かない、動かない」と、「そのうち天から何か降ってくるに違いない、何かとんでもないことが起こるかもしれない、その時に神様は何かして下さる」。奇想天外な奇跡や不思議なわざが降ってわいてくるのが信仰だと思ったら、それは違います。確かに神様が不思議なわざをして下さる。そのためには、まず自分を捨てて、実を結ぶ者として、神様のみこころに信頼し、神様の力を信じて、踏み出せとおっしゃるところに、出て行かなければならない。主が立てて下さったのですから、そこに応答していく時、自分ではない自分、到底考えられないような事態、思いがけない事態へ導いてくださる。

ここに、「**わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない**」とあります。私たちはいろいろな問題の中に置かれます。しかしその問題に押しつぶされて、「私はダメです、もうこれでいいです」と言うのではなく、主は私を選び、立てて、実を結べとおっしゃる。私たちに、神様が期待しておられることが大きいのです。しかし、つい現状維持になり、さらに現状後退、だんだん縮こまって、先細りになる。確かに身体的な力はいくら頑張っても、若い人に負けるのは当たり前です。肉体については外なる人は滅びていくのですから、当然でありましょう。しかし、だからと言って、すべてがダメではない。日々の生活のどんなことにも、

主のみこころを求め、信じて、踏み出す。新しいわざ、新しい事をつい避けようとします。どうぞ、今一度、主が私たちを選び、召して下さった目的がなんであるかを常に自覚しておきたい。

「**士師記**」**6 章 11～14 節**を朗読。

この時、イスラエルの民は、ミデアン人に攻められていた時代であります。ミデアン人がやってきて、彼らの収穫物を奪っていく。そういう悩みの中に置かれていました。ギデオンは収穫が知られないように、酒ぶねの中で麦をうっている。ミデアン人に取られないよう、隠れて麦を収穫していた。そこに神の使いがやって来ました。12 節に「**大勇士よ、主はあなたと共におられます**」と言われる。彼は大勇士どころではない。怖くて、怖気づいて隠れている。なんとか食いつなぐための収穫をしている。ところが「大勇士よ」と言われる。それに対してギデオンは大変憤慨します。「神様は私たちと共におられると言いながら、どうしてこんなことになったのですか？私たちは神の民ではないですか？かつて先祖があのエジプトの奴隷の生活から救い出されて、エジプトから導き上られたのはあなたであったが、その不思議なわざは、今はどこにもないじゃありませんか。イスラエルの民の悲惨な状態を見て下さい。ミデアン人に脅されて、奪われて、踏みつけられて、やりたい放題にされている自分たち。神様はいったいどこにいらっしゃるのですか」と、食って掛かる。

その時、14 節に「**主はふり向いて彼に言われた、『あなたはこのあなたの力をもって行って、ミデアンびとの手からイスラエルを救い出しなさい。わたしがあなたをつかわすのではありませんか』**」と。神様は、かつてエジプトにしたような不思議な事をしてあげようと言われたのではない。ギデオンに対して、「**あなたのその力をもっていけ**」とおっしゃる。その力と言っても、そんなものはありません。まあ、全然ゼロではないでしょう。ここで神の使いに食って掛かるだけの力はあるわけです。だったらその力をもって、出て行けばいいじゃないか。だって、こんなの何の役にも立たないと、ギデオンは思っていた。自分に力はない。しかし無いわけではない。少なくとも、わずかばかりの、本当にかめの粉は尽きないと言われるように、わずかしかない力かもしれない。でも、わたしがつかわす。今あるその力をもって出て行けとおっしゃる。そしてミデアン人を追い払い、イスラエルを救えとおっしゃる。こんな私がそんな事、できるわけがない。

ところが、神様はこのギデオンを使うのです。神様はギデオンに頼らなくても、どんなことでもお出来になるでしょう。しかし神様は、ご自分の力を明らかにするために、あえてこういう怖気づいた、力のないギデオンを使ったのです。そして彼をつかわした。彼はほんのわずか、三百人の仲間を連れて、ミデアン人に戦いを挑みます。その時、神様が不思議なわざをして、イスラエルに勝利を与えて下さるのです。まず最初に踏み出してい

く。つい考える。自分の力は何の役に立つだろうか。こんな吹けば飛ぶようなものでは役に立たない。もっとああなったら、こういう状況、こういうものがあれば、出て行けると考える。ところが、今あるそのままで、あなたの力をもって、出て行きなさい。神様が共にいて下さるのだから。私たちに、行って、実を結べとおっしゃる。それはただやみくもに放りだすのではなく、私があなたと共におるから、と言われる。

「ヨハネによる福音書」15 章 16 節に「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そしてあなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実をむすび、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである」と。神様はわたしたちを立てて、つかわすと言われる。こんな私で何ができましょうか。私は年を取りました。あれもできません、これもできません。こんなものもありません。その無いと言うその力をもって、出て行けと。わたしがあなたをつかわすのだから。神様の力をあらわす器として、わたしたちは召された者であること、選ばれた者であることを自覚して、主のご目的にかなう者へと造り変えられたい。

ご一緒にお祈りいたしましょう。